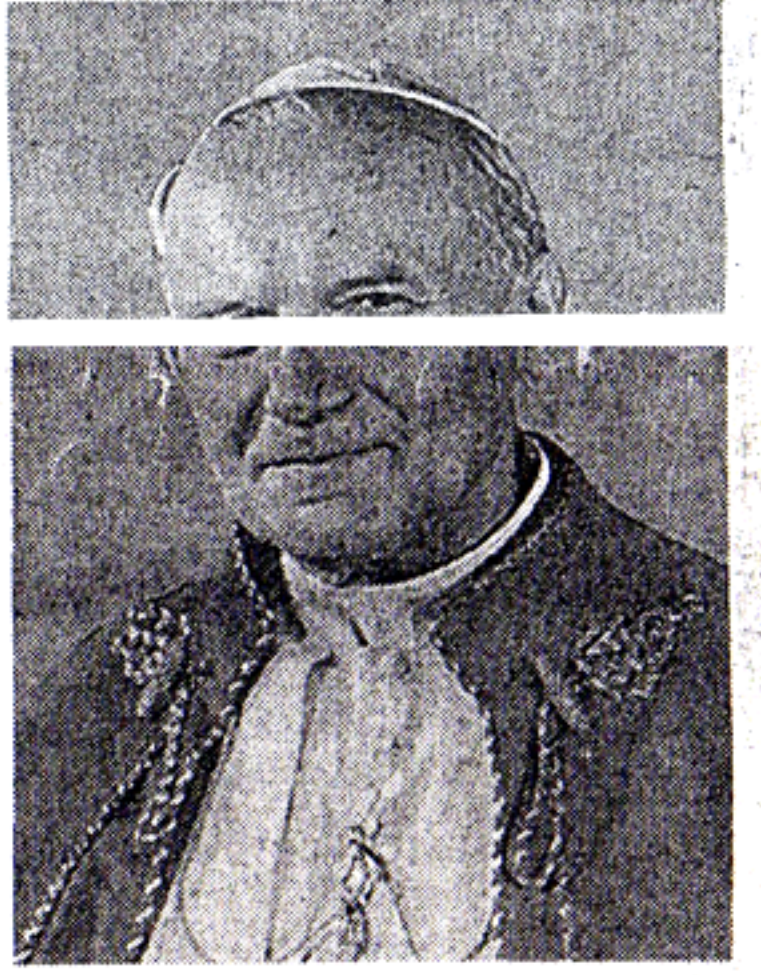


仏法への理解足りぬ教皇

自らの教義のみで判断

「カトリックの優位性」前提に

「知恵の扉を開く」は、十九の寄稿文からなる、ポーランド語で出版された本の題名です。そこでは現口マ教皇の著書『希望の扉を開く』に対して、四人のチベットの僧と一人の台湾の中国人仏教学者を含むヨーロッパとアメリカ合衆国で著名な仏教徒による批判がなされています。



教皇ヨハネ・パウロ二世

伝統にちかわれた様々な仏教の行(ぎょう)の一つを行ない、通常の人間のこころの限界、限定を超えることが必要なのです。事実、「仏教者」とは仏教教理を研究する者ではなく、仏法と一体になろうとする者のことです。現在、日本の仏教学者には、たとえば中国や日本の仏教文献を翻訳する場合、いわゆる語源的、言語学的なレベルで仏法の用語を扱ったこと、しかも仏教教理を説明するためにキリスト教の用語を援用するよう傾向がみられます。しかし、これはかえって混乱を引き起こし、仏教教理を浅薄に感じさせる結果になります。

教皇ヨハネ・パウロ二世『希望の扉を開く』に答えて

教皇の著書『希望の扉を開く』日本語版

人格を超える「仏陀」

創造主とは対比できぬ

仏教とキリスト教の教理の基本的な相違は、神の観念などではなく、人間存在のあり方にあります。仏教者は自身の苦楽に対して、自己責任を受け入れ、自己の未来を築くために、自分で決断し行動することを認めます。また、仏陀の本質は人格を超えており、こころの特別な状態にかかわることです。



実践上からも、我々人間か断絶してはいない。とは我々の未来のあるべきに至るのです。

涅槃こそ全能的状態

輪廻の世界見捨てない

すべてによって恩恵を得る方法を学ぶ者です。しかし、そのためには、仏教者は学ばなくてはならず、行なうことが必要です。仏教の実践(行・ぎょう)とは、いかなる仏教の伝統であれ、信仰(Faith)でも献身(Devotion)でもありません。それは、仏性なる強力なエネルギーにアクセスすることが本質であり、助けになるのです。仏陀の知恵と慈悲とが与えられ、我々は仏陀へと転成してゆくのです。

軽々な他宗教批判は悲しい。我々仏教者は、神の信仰をもつすべての人に、この世での最善の生と、最善の生への蘇りを念ずるものです。しかし、我がいのちの根源的解決としての仏法に生きる者にとって、自分たちは受け入れられないからといって、他の宗教を批判しなればならないという心持は、悲しいことです。

『知恵の扉を開く』ポーランドの仏教者

反論の書を出版した

ポーランド出身女性が批判

世の中に対し完全に無関心な状態「仏教の教えは後無神論的な体系」などと、無神論を誤解したような表現の個所があった。仏教界からは不満の声が渦巻いたが、表面的な盛り上がりとは、誤った仏教理解がしばしば見られる」と記している。このたび、教皇の母国ポーランド出身のエンジニア・ギンスバーク、デンマーク人のチベット仏教僧(あすか・ぶつくす)らによって、批判の書が出版された。



筆者略歴 一九四三年、ポーランド・ワルシャワ生まれ。ワルシャワ国立医学専門大学卒業後、スウェーデン、ロシア(旧ソ連)、米国の大学研究所で研究。医学博士、元ポーランド国立精神・神経医学研究所助教授、同研究所電子顕微鏡研究所主任。浄土真宗本願寺派光輪寺(横浜市)坊主、公認ポーランド真宗サング主管。

ポーランド浄土真宗代表・医学博士 妙珠・アグネス・エンジエスカ

編集局注 教皇ヨハネ・パウロ二世の著書『希望の扉を開く』は一九九四(平成六)年秋、教皇の個人的出版としてポーランド語で

発行され、欧米を中心に三浦朱門共訳、石川康輔監修)は平成八年十一月、京都・同朋舎出版から刊行された。しかし「釈迦」の章の中に「仏教の涅槃とは、

誤解正したい 仏教者として 誤解正したい 本論は、仏教者による仏法の立場を述べたものであり、仏教教団、キリスト教会の名の下に、過去から現在にわたって、事実いかに

なることがなされてきたかについて批判しているのではなく、もちろん、仏教とキリスト教についての教義的優劣を論ずるものでもない。ただ、『希望の扉を開く』の中で、明らかに仏教教理についての誤解であることについて、

は教皇の著書名にあやかって付けた仮題で、仏教徒の寄稿者には、米国の詩人アラン・ギンスバーク、デンマーク人のチベット仏教僧(あすか・ぶつくす)ら、インド人富山県高岡市の中田四五〇(善興寺刊)を御参照下さい。